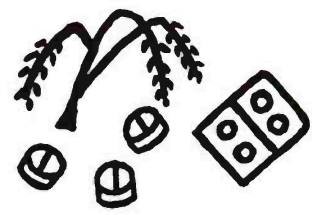


がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

使ったと伝えられています。日本でもヤナギは歯痛に効果があるとされ、つまようじの材料に使われてきました。19世紀にヤナギからサリチル酸が分離され、副作用の少ないアスピリンが世界初の人工合成薬として開発されました。アスピリンは鎮痛効果が出ないわずかな用量でも、血液をサラサラにすることで心

査でも、アスピリンの定期的な服用は消化管がんのリスクを15%、大腸がんに限れば19%も低下させることが分かっています。一方、乳がんや前立腺がん、肺がんなどではリスクの低下は見られませんでした。

米国の予防医療サービスクラス対策委員会も大腸がんを予防する目的で低用量のアスピリンを服用することを推奨しています。日本での研究でも、大腸がんになる前の病変である腺腫の再発リスクを約40%も減らすことが分かりました。安価で安全性も高いアスピリンでがんを「化学予防」できれば、医療費の抑制にも貢献するはずです。
(東京大学病院准教授)

大腸がん予防にアスピリン

大腸がんの予防効果があると考えられる薬があります。「バファリン」などの大衆薬で有名で、値段も安いアスピリン(アセチルサリチル酸)です。ヤナギの木からとったサリチ

ル酸をもとに作られました。ヤナギの鎮痛作用は古代ギリシャの頃から知られていました。「医学の父」と呼ばれるギリシャのヒポクラテスがヤナギの樹皮を痛み止めとして

筋梗塞や脳梗塞を防ぎます。この服用方法が消化管がんの予防にもなることも明らかになってきました。13万人以上の米国人を32年間も追跡した最近の大規模調

国立がん研究センターが昨年公表した2017年時点の短期予測は、がんの罹患(りかん)者が年間101万4千人にのぼります。臓器別では大腸がんが14万9500人で3年連続の1位でしたが、14年以前は胃がんが長い間トップの座を占めていました。胃がんは原因の98%程度がピロリ菌の感染とされる感染型がんの代表です。一方、大腸がんは肉中心の食事や肥満、運動不足といったメタボに直結する生活習慣が大きな原因で、これまで欧米に多いといわれていました。それが、日本の罹患(りかん)数トップになったということは、まぎれもなく日本人のがんの欧米化を意味しています。